

聞くのも、愉快な体験となるだろう(海女小屋に入れてくれるかどうか、はわからないけど)。

離島、はしど旅

またまた、簡単に、かつ乱暴にいつてしまえば、たいていの人は、離島を旅するのが好きだ。

その島に息づく文化、いまも残されている文化。そうした、非日常に触れることができるからだろうか。

島を訪れると、同じ日本という国に暮らしているのに、知らないことを教えてくれる。

でもそれは、都会に暮らし、スマートフォンばかりを眺めているぼくたちが忘れかけていることを、思い起こさせてくれるからかもしれない。

もっと正直なところをいえば、本州の都会に暮らしていることで、離島に対する、理由もない優越感をもっているからかもしれない。

でもな。本州もまた、島だ。

実際のところ、本州島という名前があるし、大陸の人たちから見れば、ほんと、本州だって小さな島のひとつではないのだ。

にもかかわらず、自分が立っている島をすっかり忘れて、離島のことを考える心躍るわたくしなのだ。

で、今回は、離島はしど旅だ。

答志島から、連絡船に乗って、神島へと向かったのだ。

ここもまた、神宿る島か

神島は、周囲が約4kmの小さな島だ。答志島からは、連絡船で20分ほどで渡ることが出来る。

山ばかりの島で、人々は北西側のわ

ずかになだらかな斜面に、ぎゅっと固まり暮らしている。

人口は500人ほど。「いまではもつと少ないかもな。実際に暮らしている人は、300人ぐらいかもしれんぞ」という話も聞いた。

ここもまた、漁業の島だ。

答志島が外洋に面したいい漁場をもつ島なら、この神島は外洋のまっただ中にある島、といえるだろう。

ぼくが島へ着いた日は、強い風が吹いていた。冷たい北西の風が、これでもか、といわんばかりに海上を吹き抜けているのだ。

港で出会ったおばあさんに「寒いですわね」とあいさつをしたら、「今日はましなほう。いつもはもつと風が強いよ」と、こともなげにいう。

連絡船も欠航が多い、という話だ。

この神島へは、一度だけ訪れたことがある。もう20数年前のこと(いや、30年近く前のことかも)。

「鳥羽く神島カヌートライアル」というイベントに参加したことがある。たしか、その第一回の開催のときだ。

鳥羽から神島へシーカヤックを漕いで渡り、島で1泊、そしてまたまた漕いで鳥羽へ、という1泊2日のイベントだった。

残念ながら、いまとなつては、そのほとんどのことを覚えていない。

神島で泊まった宿の料理が、うまかったこと。いうまでもなく、魚介尽くしである。一生のうちで、一度にあれほどの量のサザエを食べたのは、生まれて初めてだった。そんなことしか覚えていないのだ。すいません。

そのとき、せっかく神島へ行くのだから、と三島由紀夫の小説『潮騒』を読んだことを覚えている。神島を舞台とした物語で、5度も映画化されてい

Back in the Hippie Dayz



島民の笑顔が「神々が宿る島」といわしめたのだろうか。

る(映画は観ていないけど)。

でも、これまた残念なことに、その小説に書かれていた島のことは忘れてしまっていた。ストーリーは、ぼんやり覚えていたけど(それも定かではない)。

で、今回の旅へ向けて、あらたに『潮騒』を読み返したのだった。

しかし……。

結論から先にいってしまうと、これは大失敗だった。

島を歩いても、三島由紀夫の小説の描写に、右往左往する自分がいるのだ。ようするに、風景を眺めてそこで思うことは、ぼく自身の感想ではなく、三島由紀夫の目を通した景色となってしまうのだった。

たとえば、小説の冒頭には「眺めのもつとも美しい場所がふたつある」と書かれている。そしてそのふたつの場所の描写がある。

そんなの読めば、やはりその場所へ行ってみたいではないか。

で、そこへ行くと、たしかにそこからの景色は美しいんだけど、美しいと思わないと美的感覚に乏しい人間だと思われんじゃないか、という強迫観念に襲われるのだ。

自分の目に自信がないだけのことなんだけど、小説を読まずに、この景色を眺めたかったな、などと思うのだ(小説を読んでいなかっただら、そこからの景色をじっくり眺めたかどうかは、わからないけど……)。

さらには、フィクションだということとがわかっていながらもかかわらず、『新治と初江は、ここで出会ったんだな』などと、ふたりの姿をわがまぶたに思い描いてしまうのだった。

神島も、『潮騒』を観光の目玉としている(小説よりも、映画口ケ地とし

ての効果のほうが大きいだろうけど)。

小説(映画)に登場した印象的な場所には、小説から引用した文章が書かれたプレートが作られている。

さらには、「愛を誓いプロポーズするのにふさわしい場所」として『恋人の聖地』などと大きく書かれている場所もある。

「あほか、お前ら。そんなことのために、おれはこの島を舞台に純愛小説を書いたんじゃないわい!」と、三島由紀夫がああ『ぎよる目』をさらにひん剥いて怒っている姿が、ぼくには浮かぶのだが……。

ま、さておき。答志島同様、神島の人たちもだれかれなく、旅人にやさしい。まるで古くからのつきあいのよいうに、話ができるのだ。日本昔話のよいうな話を、日向ぼつこのお年寄りたちから聞くことができる。島のおじさんおばさんたちが、文化遺産だ。

そうそう。ぼくは神島と答志島に、「神々が宿る島」という観念をもっていった(名前からして、「神島」である)。

春分と秋分の日に、日の出と日の入りの方が重なる「太陽の道」に、ふたつの島はある。この東西のラインには、相当数の古代祭祀遺跡や古い神社が並んでいる。また、伊勢神宮と答志島と富士山は、夏至の日の出、冬至の日の入りのラインで結ばれている。太陽の神が宿る島々なのだ。

が、結局のところ、無節操で無宗教のぼくには、島々の旅で神さまを感じることができなかった。

魚のうまい島。人々が笑顔で迎えてくれる地。としての記憶が残ったのだ。神々が、うまい魚と笑顔の人たちを創りたもうたのか。それとも、島民の笑顔が、「神々が宿る島」といわしめたのだろうか。